

保育士養成系に学ぶ学生のピアノ力の現状と、 それに伴う問題と課題について考える

～本学学生の実態を基にして～

河原田 潤

キーワード／子ども（幼児）の歌・表現・音楽に親しむ

1. はじめに

よく、「最近の保育科学生、卒業生は、ピアノ力が落ちている。」「もっとピアノ力を向上させて現場に出してもらいたい。」等のご意見を保育現場の先生方からいただく。採用の際に「そつのない学生」「人間性」が最重要であることは言うまでもないのであろうが、ピアノについては目に、耳にはっきりとした結果が伝わってしまうことから、実力差が出てしまうことは否めない。

確かに本学では、入試においてピアノを課さない「体験入試」を主力とする体系をここ数年取っている。それゆえ、ピアノが未経験あるいは初心者状態で受験、入学してくる学生が少なくはない。

そこで保育士・幼稚園教諭を目指すものにとってピアノ力がある程度必要とすれば、最低限必要な実力の目安はどこに設定して、何を目標にすれば良いのかという問題が浮上してくる。ある養成系では、1年次終了時に「バイエル教則本を終了」と位置付けていたり、またある養成系では、学年末試験時に「子どもの歌5曲、自由曲5曲を準備し、試験時に任意の曲を演奏する」としていたり、それぞれに学生のピアノ力について頭を悩ませているようだ。本学においては、ピアノを担当していただいている非常勤講師25名の方々のご協力で見解を出していただいたところ、短大1年次終了時に「バイエル教則本 80番台を終了」程度の実力が最低限必要であるとの意見が多く、実際に現在学生へ目標として提示している。

また、ピアノ力向上のためには、ソルフェージュ（楽譜を読み取る力）の力も重要な要素になっている。学生が楽譜に向かい、人前で演奏出来るまでの時間の効率を上げるには、ソルフェージュの力があつた方がより効果が上がると期待出来るためである。

本論では、実際に学生はどの程度の実力を持って入学し、1年でどのくらいの伸びを見せているのか、そしてそこから見えてくる問題点を挙げ考察し、学生に対しての一つのきっかけになるように伝えていきたいと考える。さらに市販されている同じ曲目の楽譜を難易度別に比較し、保育現場で子どもと一緒に歌うためにどの程度を目標にするべきかを考えていこうと思う。

2. 方法

調査内容：平成23年度本学入学生の保育科・英文科のピアノを受講した1年生時に、4月入学時から、学年末試験までのレッスン曲・試験曲を調査し、さらにレッスンの様子等も調査した。（レッスン曲・試験曲は原則として教則本又は練習曲集を用い

ている。)

調査対象：本学保育科ピアノ非常勤講師25名へ学生個人についてのアンケート調査

対象学生：本学保育科・英文科平成23年度入学生の1年時にピアノを受講した者

合計232名

調査期間：平成23年4月～平成24年学年末試験時

3. 学生への目標設定

「はじめに」でも述べた通り、本学1年生に対して「バイエル教則本 80番台を終了」を最低限の目標として提示している訳だが、この「バイエル教則本 80番台」で求められている課題は、大きく分けると

- ① ニ長調・イ長調・ホ長調（調号＃2～4つ）
- ② 16分音符までの音符を使った演奏（86～90番）
- ③ ①の範囲で転調を含む曲

等が挙げられる。これを実際の楽譜で比較してみると、

137

ありがとう・さようなら

井出 隆夫 作詞
堀田和栄子 作曲

Andantino ♩=60 (おはなしをするよう)



138



< 楽譜 1 >

NHK「みんなのうた」から

Piano Arranged by Kiyoshi Okuyama

井出隆夫 作詞
堀田和幸子 作曲

Original Key = E^J

dolce (やさしい気持ち) ♪-61

Intro B \flat (やまのうた) Am7 D7 Gm7 C7 F

あ
あ

F B \flat C7 F

り がとう ささ う な ら な
り がとう ささ う な ら な
と も だ し ち
き ょ う ん ぜ い
あ

F F7 B \flat C7 F

ひ と つ つ の え す が お
と つ よ う に が き れ
は し れ た こ さ え
あ

F C7 F

は た む ー へ
ず の こ い
の た い か
あ

B \flat F Gm7 C7 F F7

あ の こ ら の
め こ る ー の
ゆ げ あ ー さ
あ

な お も い し
あ ら し い ー
に き ー
す が
ぜ

で も に
つ く
り げ

[illegible]

◎ 3. 性教育之重要性

Allegretto.

80 *mf* *leggero*

f *p* *f*

117

＜楽譜3＞が実際の「バイエル教則本80番」であるが、3拍子の伴奏型についての習得を目的に作られている。そして実際に卒園式でよく歌われる「ありがとうさようなら」を例として取り上げてみた。＜楽譜1＞は通常演奏される楽譜である。これを、「バイエル教則本80番」程度の難易度に編曲された楽譜が＜楽譜2＞になる。＜楽譜1＞と＜楽譜2＞を比較してみると、やはり歌の効果を上げるよりも、ピアノの演奏をしやすくして若干簡易的にしてあることがわかる。もちろん＜楽譜1＞の方が聴き栄えて聞こえるのは言うまでもない。しかし、＜楽譜2＞程度の難易度でも、十分曲として成立しているので、「バイエル教則本80番台を終了」程度の基礎力を持つということは、一つの目安となるであろう。

ありがとう・さようなら

作詞：井出隆夫／作曲：福田和孝子

＜楽譜4＞

さらにもう一つ、＜楽譜4＞が「ありがとうさようなら」の簡易伴奏譜である。左手の音が拍の上にならされており、和音伴奏が含まれているので、バイエル教則本にあてはめると、60番台の難易度と言える。＜楽譜1＞＜楽譜2＞＜楽譜4＞について、いずれも歌の伴奏譜としては完成されているので、演奏者の実力に合わせて楽譜を選択し、子どもと歌うのは問題ないのだが、それぞれを比較すると、やはり＜楽譜4＞は簡易的に作られているので、特に＜楽譜1＞と聴き比べると音が薄い印象が残る。音の数が多くの方が聴き栄えるのは言うまでもないことから、学生がこの曲の演奏を目指すならば＜楽譜1＞又は＜楽譜2＞が理想的であると考えられる。

4. 学生の現状（平成23年度入学生 全232名）

<1>学生の進捗状況

(1) 入学後4月レッスン開始時におけるピアノのレベル

- ① バイエル教則本 79番以前84名
- ② バイエル教則本 80番～90番32名
- ③ バイエル教則本 91番～106番（終了）29名
- ④ ブルグミュラー練習曲以上の難度87名

(2) 7月前期末試験時におけるピアノのレベル

- ① バイエル教則本 79番以前31名
- ② バイエル教則本 80番～90番24名
- ③ バイエル教則本 91番～106番（終了）47名
- ④ ブルグミュラー練習曲以上の難度130名

(3) 2月後期末試験時におけるピアノのレベル

- ① バイエル教則本 79番以前12名
- ② バイエル教則本 80番～90番12名
- ③ バイエル教則本 91番～106番（終了）26名
- ④ ブルグミュラー練習曲以上の難度182名

上記の通りである。本学保育科が目標としている「バイエル教則本 80番台を終了」程度、つまり①・②に該当している学生は、(1)時には116名おり、(2)時には55名と、約半数になっている。(3)時には24名になっており、4月当初から比べて約5分の1までになっている。人数と進捗のレベルだけを見ても、この学年はほぼ順調に目標レベルまで到達していると言える。

(4) 学年末時、学生のソルフェージュ（楽譜を読み取る力）の力について

- ⑤ 子どもの歌を歌うには問題がない力がある145名
(うち、①・②に該当する学生6名)
- ⑥ 子どもの歌を歌うにはまずまずの力がある56名
(うち、①・②に該当する学生8名)
- ⑦ 子どもの歌を歌うには力が不足している31名
(うち、①・②に該当する学生10名)

次に、学生のソルフェージュ力については上記の通りである。ソルフェージュ力が不足している学生の中で「バイエル教則本 80番台を終了」に届いていない学生の割合は3分の1ということになり、ピアノの初歩的なレベルの学生は譜読みも苦手だとは断定は出来ない結果となった。

<2>現状が抱える問題、課題とそれらについての考察

<1>の結果から、ピアノ力とソルフェージュ力はだいたい関連があると見られる。ピアノが伸び悩む学生は、大抵がソルフェージュ力は乏しい。ピアノが③・④の学生については、標準的なソルフェージュ力を持っているか、現在はあまり理解出来ていなくても、今後大丈夫そうな学生が多そうだとことが見えた。

次にそれぞれのレベルについて考えてみたい。

(1)「バイエル教則本 80番台を終了」まで達していない学生について

(3)の時点の学生が数字上24名存在し、その学生のレベルの底上げが必要な訳だが、ただ苦手、初歩的な経験と技術なのだという事でもないようだ。

- ・コツコツと取り組むが、仕上がりまでに時間がかかる。
- ・とにかく練習量・時間が足りない。
- ・自宅又は現在の生活環境でピアノを弾く場所の確保が難しい。
- ・やる気が見られない。
- ・自分に甘い。
- ・ソルフェージュ力が乏しく、譜読みが困難である。
- ・基礎力が不足しているにもかかわらず、実力以上の難易度の曲に取り組もうとする。

上記のコメントの多くが、担当教員の方々から該当学生に添えられている。指導に当たられている先生方も、上記学生のレベルに合わせて基礎力の向上に繋がるように尽力していただき、このレベルに該当する学生の底上げに取り組んでいただいている。ゆえにまず本学保育科が目標とする1学年時における「バイエル教則本 80番台を終了」に届くためには、これらの問題を解決出来るように、さらに学生一人ひとりの自覚と意欲が持つことが必要であると思われる。

(2) 現状が抱える問題・課題と考察

中にはソルフェージュ力が不足しており「バイエル教則本 80番台を終了」して次のカテゴリーの曲だけに取り組んでいる学生も少なくない。実際に⑦で21名もの学生がそれに該当している。

学生に「バイエル教則本」「ブルグミュラー練習曲集」「ソナチネアルバム」「ツェルニー練習曲」等の教本を学習させる意味は、ピアノという楽器の技術力を上げるためだけでなく、

- ・子どもと良い時間を共有できる段階まで仕上げる。
- ・子どもと一緒に歌を歌うまでの練習時間の効率を上げる。

という事が最も重要だと思われる。従って、この21名の学生についても、(1)で述べたことが当てはまると思われる。

次に、約90%の学生がある程度の子どもの歌を演奏出来るレベルにありながら、保育現場の方々から「最近の保育科学生、卒業生は、ピアノ力が落ちている。」「もっとピアノ力を向上させて現場に出してもらいたい。」等のご意見がなぜ出て来るのであろうか。

まず、学生がピアノに向かう時間が本人にとって圧倒的に少ないということが考えられる。ピアノが好きだったり得意な学生は、自然にピアノと向き合うことが出来るのだが、苦手だっ

たり、得意分野が他の分野にある学生については当然ピアノに向かう時間は少なくなるのは当然だと言える。現在の短大の宿命とも言える、授業や実習に伴う時間の過密度に伴う自由時間の減少や、学生によっては通学時間の影響も多少の原因があるとも言える。これらから、当面の課題を消化するのが精一杯で、1曲を熟達させたりレパートリーを広げたりすることも中々ままならないということが予想され、実習或いは就職後に現場での対処を難しくしているのかもしれない。

次に、楽譜を選択する能力が不足していることもその理由の一つと思われる。ピアノが得意、好きではない学生の傾向として、『自分の持っている曲集の中から、自分の実力に応じた歌の曲を選択して演奏する。』ということが考えられる。持っている楽譜或いは曲集が1～2冊で、しかもその中から自分の弾けそうな曲を選んで弾いている状態をよく目にする。実際試験の弾き歌いにも同様である。こうなってしまうと、歌う曲のレパートリーが狭まってしまい、本当は子どもと一緒に歌いたい、歌わせたい曲が演奏できず、簡単な曲に「逃げる」状況を自ら作ってしまうだけでなく、現場で代々歌い継がれている歌の楽譜を渡されると、それに付いていけないという状況も作ってしまうことになる。

本来であれば、『自分の実力に応じた歌の楽譜を選択、収集して演奏する。』ことが理想であろう。子どもと一緒に歌いたい、歌わせたい曲が難易度別に編曲された曲集を自ら選び、用意することが重要なのである。また、色々な曲集から自分のレベルに合った曲を選び出し、それを綴って自分用に持つことも同様である。（注：コピーはあくまで自分のみで学習用に用いるためだけということにする。）学生の財政的な事情があることも考慮に入れなければいけないが、こうすることによって、自分の実力の範囲内で無理なくレパートリーを増やす手掛かりに繋がると思うのである。

5. おわりに

今回の調査から、この年度の学生全体のピアノの実力について、ある程度把握が出来てきた訳であるが、そこから発生する新たな課題も浮き彫りになってきた。保育現場や実習園から学生のピアノ力についてのご意見や指導をいただく点が多々あるが、ほぼ大部分の学生が、表面上つまり期末試験という一つの事実の時点では、概ね目標基準以上の実力は備わっているのである。しかし学生の得意・不得意の意識、練習時間の確保の問題、さらに意欲的かそうでないかの感情的な問題等、数字では表すことの出来ない様々な状況が、このギャップを生んでいるとも考えられる。

保育現場において、子どもと歌を歌いながら共に良い時間を共有するのはもちろん、日常において子どもから歌を奪ってしまうことの無いように、日頃から子どもの歌のレパートリーを増やす努力は欠かせない。「練習はけして嘘はつかない。」という言葉が示す通り、曲のレパートリーを確実に自分の物にするためには練習時間を十分に確保しなければいけないが、その時間は出来るだけ効率良く、短い時間に収められれば、それに越したことはない。どうしたら自分に合った練習方法を見つけられるのか、学生一人ひとりが模索しながら手段を見つけていくきっかけも、指導する我々教員と共に考えていかなければいけないかも知れない。

今後もこの調査を継続し、年々変化するであろう保育科学生の素質や気質を出来る限り把握するように努めるべきであろう。それによって見えてくる課題や問題に対する対策を練り、解決策を考えていくことが、保育現場により良い人材を提供する一つの手段と考えていきたい

い。

参考文献

- 常葉学園短期大学幼児音楽研究会 編
幼児音楽資料集 「子どもの歌」 より
- ドレミファ出版社
こどもの行事のうた／ピアノ・ソロ・アルバム
- 全音楽譜出版社
標準バイエルピアノ教則本
- Rittor Music
こどものうた大集合210曲